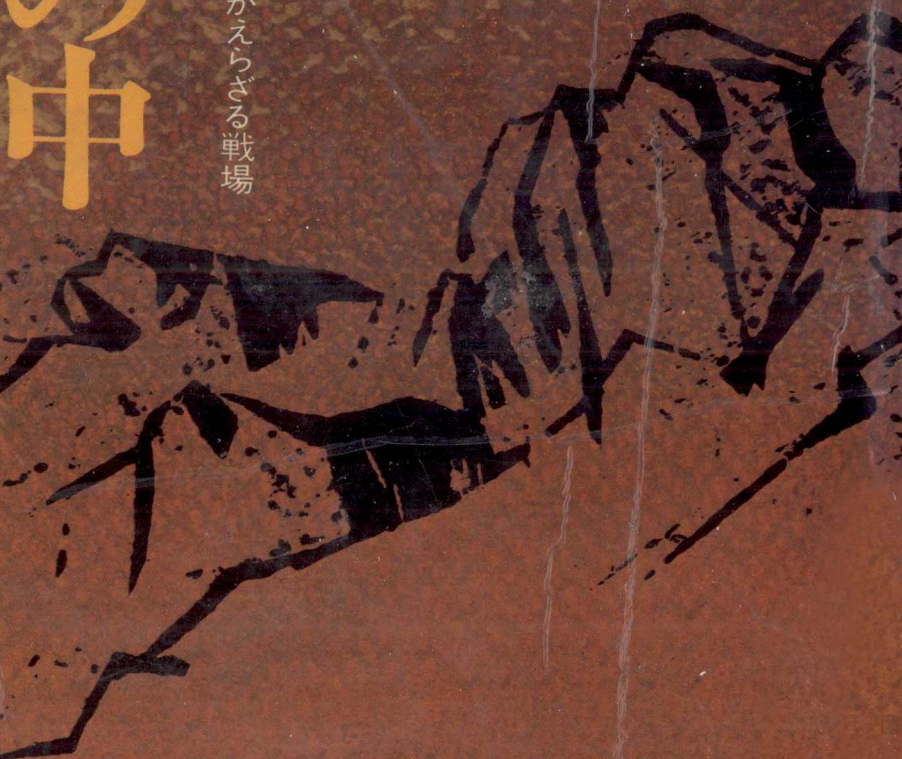


伊藤桂一 黄塵の中

かえらざる戦場



かえらざる戦場

黄塵の中

伊藤桂一



光人社刊

黄塵の中

〈かえらざる戦場〉

定価 980円

0093-10067-2241

乱丁・落丁のものはおとりかえいたします

印刷 昭和54年4月23日

第1刷 昭和54年5月9日

著者 伊藤桂一

発行者 川島 裕

発行所 株式会社光人社・

東京都千代田区九段北1-9-11

振替番号・東京7-54693番

電話・東京(03)265-1864~6

本文印刷・慶昌堂印刷株式会社

色彩印刷・興伸社 製本所・松栄堂製本所

『黄塵の中』目次

黄塵の中 5

サンジャックの敵 25

インパールの灯を——見た？

57

幼女の眼 87

担架の小隊長 107

分屯隊の家族 145

密林の挿話 165

波の果て 187

求道の戦旅 215

揚子江岸の放浪 231

あとがき 269

カバ！・扉絵

山崎佐一郎

黄塵の中

へかえらざる戦場へ

黄塵の中

中国の戦場では、ある程度の人数の兵隊が駐屯している場所には、必ず、商売のための在留邦人が来ていた。商売——というのは、食堂とか写真屋とか慰安所などである。

邦人が来ない時には、朝鮮人が来るか、または現地の中国人が来た。大きい町では、たとえば慰安所などは、邦人が日本女性を、朝鮮人が朝鮮女性を、中国人が中国女性を慰安婦として、開業していたりした。しかし、慰安所は、なにも女性を必要とするから、そう簡単に開業はできなかったし、写真屋も、技術が伴うので、やはり手軽にはできない。その点、食堂は、だれにも手軽にできた。時には、部隊が材料の援助をして、身軽な現地人に、開業させたりもしたのである。

この食堂も、むろん簡素なものではあったが、甘味品を作って売りさえすれば、一応、兵隊には喜ばれた。饅頭とか、今川焼とか、汁粉の類である。ことに餛飩あんまきは喜ばれた。卵をまぜた小麦粉の衣で、餛飩をくるんだものである。形も小綺麗でよい。兵隊はたいがい、酒も飲めば、甘いものも食べた。酒を飲まないものは、当然、甘いものを好んで食べた。兵隊はだれも、給料の大半は、食堂と慰安所で遣つかってしまつたのである。

昭和十×年——の春先のことである。

華北山西省の山中の、Y県城に駐屯していた部隊の、情報班長である松原中尉は、使いをやつて呼び出した、配属の自動車隊の中富上等兵が来ると、記録係の宮島軍曹とともに、事務室の片隅で、さしむかった。

このあたりの民家は、すべて煉瓦を積んで建ててある。家の内部は、各室に床を築き、床の中に暖房用のオンドルが通っている。片隅でコークスを焚くと、煙が床下の通路を匍^はつて、屋根に抜ける仕掛けである。こうした民家の一群ずつを、部隊は、本部、各中銃隊、配属部隊などで、接収して、兵舎として使っていた。

松原中尉は、中富上等兵とさしむかうと、申しつけてあったので、情報班の兵隊が、茶と餛飩を持ってきた。餛飩は、アルミの皿に、各自二つずつのついていた。餛飩は、師団司令部のあるR県城へ連絡に出た者に頼んで、買寄せたものである。

「どうだ、食わないか」

といって、松原中尉が、自分も一つとり、中富にもすすめたが、中富は、

「自分はちょっと、胃を痛めておりますので」

といって、餛飩には関心を示さなかった。

中尉は、その中富の様子を、冷たく観察するようにみてからいった。

「餛飩の一つや二つ、胃に、どうということもないだろう。そういえば、この間もお前は、餛飩を食わなかったそうだな。宮島が、そういつておった。——実は、今日、お前に、ここへ来ても

らったのは、餛飩の、いや、餛飩屋の陳のことについて、少々きいてみたいことがあったからだよ」

中尉は、感情をこめずに、さらさらとそういっただけだが、すると中尉は、それまでもどこか固い表情をしていたのが、あきらかに心の動揺をみせて、青ざめた表情になったのである。

松原中尉が、宮島がいていた、という話は、こうである。

部隊では、師団司令部のあるR県城へ、随時、連絡のためのトラックを出している。連絡者が小人数の時は、護衛の分隊がつく。連絡のほかに、支給される糧秣や、宣撫用の物資を運んでくることもある。

数日前、宮島軍曹は、配属の自動車隊から、トラック一台を出してもらい、R県城へ連絡に出たが、この時、自動車隊からは、中富上等兵と木屋上等兵がきた。交代で運転するのである。R県城までは、山道を、百キロ近く走る。このあたりは黄土地帯だから、どこも黄砂の道である。

宮島は、司令部との連絡用務のほかに、部隊から頼まれた用件を持っていた。それは、R県城で、餛飩屋を開業してくれる在留邦人をみつけることである。というのは、ずっと餛飩屋をやっていた現地人の陳という男が、どういうわけか、勝手に商売をやめてしまったので、どうしてもその交代が欲しかったのである。餛飩は、酒保でもつくれないことはないが、やはり民間の食堂でつくって売るほうが、兵隊の気分もくつろいでよいのである。それに酒保には酒保の仕事がある。加給品や夜間勤務者用の小夜食（間食）にする饅頭をつくったりするので忙しい。

司令部の情報班では、餛飩屋開業希望者について、心当たりをさがしておいてやろう、と、約束してくれている。それで、宮島は、ともかく安心して、あとは、あちこちから頼まれていたの、町の餛飩屋から、餛飩をしっかり買い込んで帰途についたのだが、帰りの車の中で、自分用に買った餛飩を、助手席でひろげて、運転中の中富にやろうとしたら、中富は、

「自分はちょっと胃を痛めておりますので」

といって、遠慮をしている。

隊へもどって、夕食の時、宮島はそれを思い出したらしく、松原中尉に、

「こっちは、餛飩屋に通いづめみたいだった中富を、よく知ってますからね。妙な感じです。餛飩巻も食えんほど、胃が悪そうにもみえませんでしたよ。木屋にきくと、一緒に、女は抱きに行っているんです」

と、話している。

「餛飩をみると、食欲がなくなるんじゃないのか」

と、そのとき、松原中尉はいっている。

「なにか、わけがあつて、ということですか」

「そうだ。この間から、なにやら頭にひっかかって離れんことがあるんだが、いま、お前の話をきいて、やはり、当たってみる気になった。さぐっておいてから、呼び出すか」

その中富を前にして、松原中尉は、調査追及——をすることになったわけだが、話は、いきな

り、核心に触れはじめている。

「先日、うちで使っている密偵から、日本軍のトラックが一台、八路（中共軍）に包囲されて捕まった、という報告がはいってきたんだ。ところが、うちの隊はむろん、他部隊に問い合わせても、そういう事実がないんだ。それで、密偵の、点数稼ぎの偽報か、住民からきいた誤報かと思つたが、どうも、そうとばかりはいいい切れんふしもある。気になるので、当日のことを、なおよく調査してみると、その密偵報の状況につながるトラックは、一台だけ、うちから出たのがあるんだ。トラックが、八路に囲まれたのは、楊村付近ということだが、三月十一日の午後、うちのトラックが、そこを通過しているはずなのだ」

松原中尉は、そこまでひと息にいつて、いったん口をつぐんだが、中富は黙っていた。中尉が、まだ話をつづける気ぶりだったからである。中尉は、つづけた。

「——いま、うちからトラックが出ている、といったが、このトラックの運転手は、中富、お前と、ほかに竹塚上等兵だったんだ。この時の連絡者は、経理室から高級主計の浅谷中尉以下三名、それに連絡と護衛をかねて、本部関係から四名出ている。計九名だ。これだけいれば、かりに、少々の敵と遭遇しても、なんとかしのげたはずだが、奇妙なのは、敵に包囲され、応戦したに違いないのに、それにしては、トラックに弾痕が一つもないことだ。つまり、無傷の状態で、八路に捕まっている、ということになる。もっとも、おれは、お前のトラックが、密偵報に関係あるもの、と、断定しているわけではない。ただ、おれはおれなりに、情報を分析し、その裏づけをとった上で、推測しているのだ。だから、あとは、お前の話をきいてみよう、と思ったのだ。あの日、お前のトラックは、二十四時近くになって帰隊している。途中で故障した、ということに

なっているのも、知っている」

そこで、また、ひと息入れてから、

「かりにだが、お前のトラックが、八路の手に陥^{*}ちたとして、どういうわけで無事にもどれたのか、ということが、おれにはどうにもふしぎでならない」

といい、さらに、

「これも推量だが、向こうとこちらに、なんらかの妥協があったんじゃないか、という気もするのな。もし、そうとすれば、それはどういう内容の妥協か、ということになる。それを、きいてみたいのだ」

そこで、中尉は、びしっと口をとめて、中富をみた。口調は、やはり、きびしくはなかったのだが、口にしてゐる言葉の意味は、おそろしく、きびしい。

裏づけに、かなりの自信をもって、そういつているのが、中尉の態度から、おのずと、にじみ出ていたのである。

中富は、話をきいている間も、別に、悪びれた様子はみせていなかった。動揺しながらも、覚悟をきめて、観念するところがあつたのだらう。それでも、しばらくは、考え込んでいたが、やがて、

「中尉殿の、いわれることは、よくわかります」と、前置きをしてから、つづけた。

「あの日は、午後に、黄塵がひどくなりました。その中で、いま、中尉殿が申されたようなでき

ことが、起きております。それについての、具体的なことを、お話し申し上げます」

そうして、中富は、当日の模様を、つぎのように話してきかせたのである。

このあたりの黄塵は、激しい時には、視界はまるでなくなってしまう。砂漠の砂あらしに似ている。トラックが、隊を出た時には、晴天の気分がいい日だったが、山中を四十キロあまり走って、楊村に近づいていたころ、突風のように黄塵が襲ってきて、トラックは、手さぐりのような前進をつづけた。

トラックは、そのうち、道の前方に、障碍物を発見して、停車している。障碍物というのは、煉瓦や、古材や、こわれた家具などを、道に、山と積み上げてあったことである。知らずに直進すれば、これに乗り上げて、転倒しかねない。これが、八路兵の計画的な待ち伏せだったのである。

「八路が、こういう奇襲攻撃をかけてくることは、ここらでは、例がありませんでしたので、自分たちは、はじめは、それを八路のやったこととは、気がつきませんでした。トラックをとめたあと、八路から軍使がきました」

「軍使？」

「はい。そのときには、黄塵の晴れ間に、まわりの丘陵上が、びっしりと八路兵で埋まっているのがみえました。向こうは、よほど優勢のため、軍使を送って、投降をすすめてきたのであります」

中富は、そう語ったが、中身の重大な割に、落ちついた口ぶりである。もっとも中富は古参の兵隊だからでもある。

「それで、投降した——というのか？」

「はい。実は、こういうことを申し上げては何ですが、はじめ自分たちは、投降勧告を蹴ることを申し合わせました。八路の兵力は百名ぐらいたったのです。もし戦えば、どっちみち、こちらが全滅してしまったと思います。こちらの装備は小銃だけでした。いずれにしろ、こちらに油断があつて、囲まれてしまったことになります。ところが自分らが、応戦しようと覚悟をきめました時に、主計殿が、すでに勝敗はきまつているから、投降したがよい、と申されました」

主計もだが、軍医や獣医などの特殊任務についている人たちは、軍隊では、準戦闘員とみなされている。無益な戦いをして死ぬことの愚を、よく知っている人たちでもある。

「自分たちは、主計殿と、ちょっとした間、いい争いましたが、完全に包囲されておりますし、ほかに、主計殿に傾く者も出て、やむなく、そこで投降をしました」

「それで、八路の本部へ連れて行かれたのだな」

「はい。これは、あとでわかったことですが、かれらは、ほかの目的で行動中、日本軍のトラックが一台走ってくるのをみて、これを捕捉することにしましたのです。それで、急遽、きゆうきよ待ち伏せの態勢をとりはじめている時に、かれらにとつては、まことに幸運に、黄塵が吹きまくってきたのです。自分たちは、投降したあと、兵器をとり上げられ、八路兵二十人ほどがトラックに乗り込んできました、その指示で、そこから十キロほど奥にある小さい部落へ連れて行かれました。山裾の土壁で囲まれた、たしか李王村といいました。そこへ着いたところには、黄塵もおさまっておりますが、そこが本部とみえて、やはり一団の八路兵がいました。その八路兵の中に」

そこで、中富は、ほんのしばし、言葉をとめ、呼吸を整えるようにしてから、

「餡巻屋の陳がおりましたのです」

と、いった。

「陳が？　そこにいたのか？」

「おりました。それも、幹部のひとりだったのです」

うむ——と、松原中尉は、さすがに、そこで考え込んでいる。

「——トラックを襲撃させたのも、すると、陳の指示、ということになるのか？」

と、ややあって、中尉はたずねている。

「いえ、陳は、なにも知らなかったようです。いま、申し上げましたように、トラック襲撃は、偶発的に、かれらがやったことです。捕獲されたトラックの中に、陳とはよく顔見知りの、自分が乗っていた、というわけです。陳は、自分をみつけて、驚いております」

陳——は、Y県城内で、妻と小さな娘と三人で、食堂を営み、主として餡巻を焼いていたのである。兵隊たちはだれもがこの常連——といっってしまったてよかったが、ことに、中富とは、馴染が深かった。それは、中富が、酒を飲まぬ代わりに、大の餡巻好きだったためもあり、また、中富の運転するトラックで、陳や家族は、R県城へ行ったり、帰ったりしていたからである。いわば、家族的なつきあいに似たものが、中富と陳たちとの間にはあった、ということになる。このことは、松原中尉も、ほぼその実情を察してはいる。

「陳は、従いまして、自分が捕虜になったことに、当惑を覚えた顔つきをしました。はっきりい